

## マーケット概況（2019年4月）

4月の債券相場は、米中貿易協議の進展期待から米国市場で株高債券安となった流れを受けて売り優勢で始まると、その後は入札を無難にこなしつつ、揉み合いながら推移した。11日の残存15.5年～39年を対象とした流動性供給入札が堅調な結果となると、イールドカーブは超長期ゾーン主導でフラットニングし、40年11回債の利回りは2016年10月4日以来となる0.520%まで低下した。16日の20年債入札も順調な結果となったが、翌日の日銀買入オペが軟調な結果となると、10年354回債は-0.010%、20年168回債は0.400%と月の安値圏まで売られ、債券先物6月限は一時152円32銭まで下落した。18日の流動性供給入札が無難な結果となったことで相場が持ち直す場面も見られたが、19日の日銀買入オペにおいて超長期ゾーンの買入額が減額されると、一転してスティーピング圧力が強まる展開となった。25日の日銀金融政策決定会合では、金融緩和継続のための諸措置とともに、少なくとも2020年春頃まで低金利を維持することが明確にされたが、相場への影響は限定的となった。連休を控えた26日には、日銀買入オペの結果を受けて買いが優勢となり、10年354回債の利回りは-0.045%で平成の取引を終えた。

### <短国市場>

前半は新年度から入札が連続することへの警戒やレポ金利の上昇に伴い、3M金利が上昇した。3日の3M823回債入札では、最高落札利回りが▲0.1497%と前回債から3bp程度上昇した。中旬以降はベシススワップのマイナス金利幅拡大による海外投資家の需要が旺盛となり、12日の3M826回債入札では▲0.18%台に低下し、その後のセカンダリー市場でも▲0.190%まで低下して取引された。19日の3M828回債では入札日と受渡日が欧州市場の休場と重なったことが嫌気され、最高落札利回りは▲0.13%台まで大幅に上昇した。月末にかけては海外投資家の買い需要から値を戻し3M828回債は▲0.170%で取引を終えた。

### <一般債市場>

新発10年政保債は国債カーブ+9.0bp、地方債は同+15.0bpと、ともに前月と同水準で条件決定した。一方、5年地方債は0.01%クーポンと前月比1.0bp低下し、2017年8月以来の水準となったが、いずれも順調に消化された。既発債も期初の運用ニーズから需給は良好で、流通実勢に目立った変化は見られなかった。社債では、ソフトバンクグループがリテール債で過去最大の5,000億円を起債したことに加え、ブリヂストン、東京電力パワーグリッド、KDDIなどの大型発行が続き、4月債としては過去最高の1兆6,430億円が発行された。また、銘柄数も48銘柄と同月債としては1998年以来の高水準となり、高格付け債を中心に人気化する様相となった。

### ◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#354	-0.065(2日)	-0.065(2日)	-0.010(17日)	-0.045(26日)
#353	-0.085(1日)	-0.085(1日)	-0.025(17日)	-0.060(26日)
#343	-0.200(1日)	-0.200(1日)	-0.125(17日)	-0.160(26日)
#139(5Y)	-0.165(9日)	-0.175(10日)	-0.135(17日)	-0.170(26日)
#168(20Y)	0.380(16日)	0.360(16日)	0.400(17日)	0.370(26日)
#825TDB(6M)	-0.170(9日)	-0.200(10日)	-0.170(9日)	-0.200(10日)
#822-#828TDB(3M)	-0.180(3日)	-0.205(10日)	-0.140(19日)	-0.170(25日)